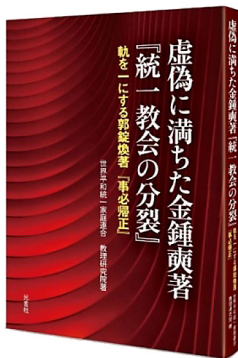


続・UCIを支持する人々の言説の誤り(16)

UCI(いわゆる「郭グループ」)およびFPA(家庭平和協会)を支持する櫻井正実氏は、二〇二一年六月三日、「**第四アダムに対する理解**」と題する動画を公開しました。彼はその動画で「**二〇二一年は第四アダム時代の第一目です**」と非原理的な、摂理観なるものを語り、**動画の終わりのほうでは、「韓子(ハム)の母の位置を離れ、お父様が聖和された」**今の状況であるとしたうえで、「**今現在この地上で真の父母に立たれている方は、顯進様と全淑様である**」と断言しています。文顯進様夫妻が「**今現在……真の父母に立たれている**」との主張は、真のお父様のみ言や「原理」に照らし合わせると、とんでもない非原理的な主張にほかなりません。今回は、櫻井正実氏の語る「真の父母観」なるものが、いかに非原理的であるのかについて明らかにします。

なお、これらの問題点を総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文サイト」(<http://trueparents.jp/>)の掲載文や映像をごらんください。

教理研究院



注、真の父母様のみ言や「原理講論」の引用は「青い字」で、UCIおよびFPA側の主張は「茶色の字」で区別しています。

十六、真のお父様のみ言と異なる主張をする文顯進様は、第四アダムでも、真の父母でもない(1) 真のお父様の指導に従わなかった文顯進様は「**自分は第四アダムである**」と自称しています。



すると、真のお父様は「世界平和統一家庭連合時代」の信仰における子女の立場について、次のように語っておられます。

「**長子と次子(子女たち)は母親の名のもとに絶対服従しなければならぬのです。服従するようにしなければ父と連結します**」(『主要儀式と宣布式III』151ページ)

真のお父様は家庭連合時代の信仰において、子女たちが母親の名のもとに絶対服従することを願っておられ、母に絶対服従するようになってこそ父と連結

また、二〇〇八年四月六日のハワイの式典【写真を参照】においても、真のお父様は顯進様と國進様に対して直接「**あなたたちカインとアベルが、お母様の言葉に絶対服従しなければなりません**」と語って信仰指導しておられました。

教理研究院著『虚偽に満ち

また、UCIを支持する人たちは、顯進様夫妻を「真の父母」として祭り上げています。しかしながら、真のお父様が「**顯進が第四アダムである**」と語られたことはなく、また、「**顯進様夫妻が真の父母である**」という主張は非原理的であり、み言から外れています。

UCI問題が表面化したのは二〇〇九年三月八日のいわゆる「東草事件」からでした。しかし、すでにその兆しとなる言動が二〇〇〇年五月の時点から始まっていた。

教理研究院著『虚偽に満ちた金鐘夷著『統一教会の分裂』』軌を一にする郭錠煥著「**事必帰正**」(光言社)で取り上げている内容ですが、二〇〇〇年三月三十一日に顯進様がワールドカープの世界会長に就任した頃から、その関係者らが顯進様を真のお父様よりも前面に押し立てて報告するようになりました。それを受けて、お父

真の父母様宣布文サイトはこちらから↓



様は同年五月三十一日、顯進様に対して「警告」のみ言を語っておられます。

「**父の伝統に従って、母の伝統に従って、三番目に息子である。それを知っているの？ ……母の伝統を立てる前に、息子の伝統を立てることができないことを知っているの？**」(マルスム選集323-83)と語られ、まず父の伝統、そして母の伝統に従って、三番目に息子であるという原則を明確にされました。そのうえで、「**顯進は私(お父様)が前に立たせているのです。立たせることで、先生より前面に押し立てて報告するなというのです。分かりますか。何のことか？ 統一教会から党派をつくる輩(非原理集団)になります。……恐ろしく、とんでもないことです。ですから、転換時代に精神を引き締めなければなりません**」(同323-91-92)

真のお父様は、まず父の伝統

た金鐘夷著「統一教会の分裂」で取り上げている内容ですが、顯進様が説くアイデンティティーは、ことごとく真のお父様のみ言や「原理」と食い違った主張となっています。この事實は、お父様が指導しておられる「**父の伝統に従って、母の伝統に従って、三番目に息子である**」という天の願う基準から、顯進様が大きくずれていることを明確に示しています。

(2) 真のお父様と全く一体化できなかつた文顯進様

ところで、神の摂理において信仰の継承が摂理の進展を左右する重要な課題となっています。『世界家庭』二〇二一年六月号の「解説」で述べていますが、復帰摂理歴史を見れば明確に分かるように、歴史的勝利者になるためには、摂理の中心人物との一体化が極めて重要になっていきます。

例えば、ノア家庭の摂理にお

いて、息子ハムは、信仰基台を勝利したノアの勝利圏を相続するために「**ノアと、心情的に一体不可分の立場に立たなければならなかつた**」(『原理講論』310ページ)とあるように、ノアとの心情一体化によって信仰を継承しなければなりません。しかしながら、ノアと一体化できなかつた息子ハムは摂理から外れてしまいました。

そして、アブラハム家庭の摂理においては、父アブラハムと息子イサクの一体化が摂理の勝敗を決する重要なポイントとなりました。「**アブラハムの忠誠と、それに劣らないイサクの忠誠とが合致して、イサク献祭に成功し、サタンを分立するこ**とができた」(同329ページ)とあるように、父と息子の一体化が成されたがゆえに勝利することができました。

この「信仰の継承」を考えたときに、真のお父様は顯進様に

伝統に従って、三番目に息子である」と指導しておられたと言えるのです。ところが、顯進様は真の父母様と一つになることができずに、非常に難しい関係にあったことを、郭錠煥氏は『事必帰正』で次のように告白しています。

「父母様と顯進様の関係を理解するのが困難です。私が不足なゆえに、分かり得ません。真の愛の道がなぜ、このように難しくなければならぬのか分かりますませぬ」(郭錠煥著『事必帰正』240ページ)

郭錠煥氏は、真の父母様と顯進様の関係について「なぜ、このように難しくなければならぬのか」と述べています。

また、真のお父様は二〇一〇年七月十六日、神山威氏をポータ上に呼び、いわゆる「ポート会議」で次のように語っておられます。

「(顯進は)もう、ずっと前に離れたんだよ、十年前に」「顯

進は先生と同じ方向に向いていない。逃げ回っている。顯進が先生の方向に来なければならぬんだよ」「顯進は先生と同等の立場を取っている」

このように顯進様は、真の父母様と一体化できず、非常に難しい関係にあったにもかかわらず、UCI側の人々は「顯進様は第四次アダムである」と強弁し続けてきました。

そこで教理研究院は「第四次アダムは顯進様である」と語られた真のお父様のみ言は存在しないことを指摘しました。それに対して、彼らは「確かに」「第四次アダム」に関して言うなら、お父様が直接、公式的な場で「第四次アダムは顯進だ」と明言されたことはない(参照：<https://align-with-god.org/blog/archives/544>)と、お父様が直接明言された事実はないことを認めました。

その後も、彼らは二〇二一年四月十三日の反論文で「お父様

が公式席上で語られたみ言になかったというだけで、第四次アダムが顯進様ではなかったということになるとでもいうのだろうか」と、開き直りとも言える発言をし、真のお父様が直接語られたみ言の根拠を示すことができませんでした。結局、UCI側は「顯進様は第四次アダムである」と、自称しているにすぎません。

櫻井正実氏が公開した動画において、櫻井正実氏は「お父様は、顯進様には直接、おまえが第四次アダムであるということ語っていらっしゃいます」などと述べています。ところが彼は、そのみ言の根拠を明確にしません。

前述したように、真のお父様ご自身はいわゆる「ポート会議」で、「(顯進は)もう、ずっと前に離れたんだよ、十年前に」「顯進は先生と同じ方向に向いていない。逃げ回っている」と語られ、さらに「彼ら(UCI側)

のことが、一つ聞いて、二つ聞いて、三つ聞いたら全部、うそばかり」とも語っておられます。この動画が公になって以上、なおさらのことUCI側としては、お父様のみ言の根拠をしっかりと提示すべきであると言えるでしょう。

ところで、真のお父様は「第四次アダム」について、次のように語っておられます。「地上では祝福を受けた家庭が、真の父母と縦的な関係における第四次アダムの資格をもちます。真の父母を中心とした第四次アダム圏時代は今日から始まるのです」(『主要儀式と宣布式Ⅲ』211ページ)、「真の父母は第四次アダム圏時代をつくられましたから、祝福家庭としてこの時代に生きる人は皆、第四次アダムになります」(同220ページ)

真のお父様は「真の父母と縦的な関係」において、祝福家庭は皆、第四次アダムになると明確

にしておられます。UCI側の言う「顯進様は第四次アダムである」という主張は、お父様の直接的な言及がなく、単に彼らが自称している「虚偽の言説」にすぎません。

(3) 非原理的な「摂理観」なるものを打ち出すUCI・FPA

前述したように、UCI問題が表面化するようになったのは二〇〇九年三月八日のいわゆる「東草事件」でした。そのとき、真のお父様は、顯進様に対して「真の父母様に対する学習、カイン・アベルの関係を勉強しなさい」(マルスム選集609-134)、「顯進は勉強しなければなりません。郭錠煥が『平和神經』を教えてあげなさい」(同609-131)、「顯進、おまえも別の所に行かず、父の所に来て、父について回りなさい」(同609-133)等々と指示されました。

これは、顯進様の説く「言

説」が、真のお父様のみ言と異なっているからにはかなりません。お父様はそのことを明確に見抜いておられたのです。ところが、顯進様は「真の父母様に対する学習」をしようとせず、また「父について回(る)」こともしないで、お父様の指示に一切従おうとしませんでした。これは、お父様が指導しておられた「父の伝統に従って、母の伝統に従って」という父母の願いから、顯進様が完全に外れている事実を物語っています。

『世界家庭』二〇二一年五月号掲載の「解説」の「郭錠煥氏のトゥールレガシーTVの虚偽」を暴く・その8」で説明しましたが、驚くことにUCI側は「東草事件」が起こった二〇〇九年を起点として、二〇一五年までを「第一次七年期」と位置づけており、そして二〇一六年からは「実体王国を建設するための基盤を立てる第二次七年期」が始まる年とする、独

自の非原理的な「摂理観」なるものを打ち出しています。

真のお父様は、「顯進、おまえも別の所に行かず、父の所に来て、父について回りなさい」(同609-133)と、真の父母との一体化を願っておられたのです。しかしながら、顯進様はその父母の願いに応えようとせず、真の父母様の摂理と関係のない非原理的な「摂理観」なるものを打ち出していたのです。これは、真の父母への「不信仰」「非原理的行動」以外の何ものでもありません。

UCI側が公開している二〇一六年一月一日の文顯進様の祈禱で、顯進様は「二〇一六年は……第二次七年期を始める年です」などと祈っています。このUCI側の説く非原理的な「摂理観」なるものは、いわゆる「東草事件」が起点となっているものです。これは、「別の所に行かず……父について回りなさい」と願われた真の父母の



2016年はあなたの実体王国を建設する為の基盤を立てる 第2次7年期を始める年です。

2016年1月1日の文顯進様の祈禱

願いから大きく離れた非原理的な祈禱になっていきます。真のお父様が「真の父母を中心とした第四次アダム圏時代」と語っておられるにもかかわらず、文顯進様は真の父母様と関係のない、非原理的な「摂理観」を打ち出していたのです。

また、彼らが「第二次七年期」なるものを打ち出した二〇

一六年には、なぜUCI問題が起ったのかを説明しているUCI側を擁護する書籍、金鍾奭著『統一教会の分裂』が出版されました。そして、その書籍をUCI側の人たちが広めました。しかし、その内容は教理研究院著『虚偽に満ちた金鍾奭著「統一教会の分裂」で明らかにしたように、真のお父様のみ言を改竄することで書いている、とんでもない書籍です。

UCI側の人々は、文顯進様が真のお母様の陰謀によって続一家から追い出されたという、いわゆる「**真のお母様陰謀論**」を主張していますが、これはみ言改竄に基づいた、虚偽のストーリーです。この書籍は、真の父母様に対する絶対信仰を失わせる目的で書かれた、歴史に残る反撰理的な「悪書」にほかなりません。

そして、彼らは、非原理的な「撰理観」なるものに基づき「**二〇二〇年は一つの時代の終わり**

を告げる……真のお父様の御聖誕百周年」であるとし、二〇二一年から「**第三アダム**によって立てられた……遺業と先例を継承する**第四アダム時代の始まりを示す年**」であると主張し、冒頭で述べたように、真の父母様に代わって文顯進様夫妻を、真の父母様として担ぎ上げようとしているのです。

しかし、真のお父様のみ言に基づくならば、ある特定の時期を区切って「真の父母の時代」が終わりを告げるということは絶対ありません。私たちは、人類の「真の父母」という存在は、永遠に唯一なる存在であることを明確にしておかなければなりません。

(4) 人類歴史において、人類の「真の父母」は永遠に一組
真のお父様はいわゆる「東草事件」のとき、顯進様に対し「真の父母様に対する学習、カイン・アベルの関係を勉強しな

さい」(マルスム選集609-134)、「顯進は勉強しなければなりません。郭錠煥が『**平和神經**』を教えてあげなさい」(同609-131)と指示されました。これは、顯進様が『**平和神經**』を学んで「真の父母」に対する正しい理解をすることを願っておられたからにほかなりません。それは、お父様は、顯進様をはじめUCI側の人々の「真の父母観」が「原理」からずれ、間違った理解をしていることを見抜いておられたからです。

『**平和神經**』は、「アダムとエバを創造された神様の目的」と題する箇所「真の父母」について次のように述べています。

「アダムとエバが完成して完全一体を成した愛の実体になれば、そこに神様が臨在して人類の真の愛の父母にならうとされたのです。神様の形状的な実体の父母の立場に立つアダムとエバは、実体の子女を繁殖するこ

とにより、理想家庭、理想世界を成し遂げたことでしょう。……神様は、真の愛を中心としてアダムとエバに臨在されることにより、**人類の真の父母、実体の父母**としておられ、アダムとエバが地上の生涯を終えて靈界に行けば、**それでもアダムとエバの形状で、彼らの体を使って、真の父母の姿で顯現されるようになるのです**」(54-55ページ)

人類の「真の父母」は、本来、人間始祖アダムとエバがなるべきでした。しかし、墮落することと、彼らは人類の「真の父母」になることができませんでした。

『**原理講論**』は、「天国は……人間一人の容貌に似た世界である……天国においては、神の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かって動じ静まるようになる」(69ページ)と論じています。

人類一家族の理想世界とは、人間始祖としての「真の父母」が立ち、その「真の父母」を中心に「一つの目的に向かって動じ静まる」世界です。「人間一人の容貌に似た世界」なので、その世界に、人類の「真の父母」は一組だけです。真のお父様は、次のように語っておられます。

「真の父母様は一組だけです。今、この時の一度だけだということです。過去にもいなかったのであり、未来にもいません。真の父母様が肉身をもって実体で存在するのは、この時だけだということです。永遠の中でたった一度です」(『永遠に唯一なる真の父母』97ページ)

「真」という言葉は、代表的であるという意味です。ですから、真の父母というものは、二組はあり得ません。一組しかいないのです。過去には存在せず、現在に一組だけ存在し、後代にも存在しません」(同99ページ)

国における、国家的勝利圏を築き上げてきましたが、この基盤の上にメシヤを迎えて一体化させて世界的勝利圏を築くことがキリスト教をはじめとする数多くの宗教の願いであり、そのような考え方が、**再臨思想**なのです。中には「メシヤ無しに直接神に行けばいいではないか、なぜメシヤが必要なのか」と言う人がいるかもしれませんが、そうではありません。真の父母がいなくては、地上天国の中心が定まらないのです。地上天国ができれば天上の天国も形成されないのです。なぜならば、地上に天国ができれば、それが自然に天上の天国へと移っていくからです。そのために、地上でメシヤを迎えなければならぬのです」(『ファミリー』1982年9月号10ページ)

このように、天一国における人類の「真の父母」は、天国の中心を定める、中心ポイントなのであり、その方は永遠に一組しかいません。そして、人類の「真の父母」が現れたなら、その「中心」である「真の父母」が移り変わっていくことはありません。真のお父様は次のように語っておられます。

「今日、皆さんが知るべきことは、過去や、現在や、未来において永遠にたええられ得るその名前とは何かということ。それは、**真なる父母、「真の父母」です。……「真の父母」という名前が出てくること**によって、神様の創造理想世界、エデンの園から出発すべきだった永遠の**未来の天国**が、ここから出発するのです。その**事実**は歴史であり、**時代的**であり、**未来的**なのです。それゆえ、**過去、現在、未来の全体の歴史**をひっくり返して見るとき、この地上に**顯現した「真の父母」は、宇宙の中心を決定する中心ポイント**であるということ、皆さんは

知るべきです」(『真の父母』203-204ページ)

人類の「真の父母」は勝利した人間始祖の立場です。人間始祖が二組も、三組も存在することは絶対ありません。永遠に一組です。

「真の父母」というとき、家庭における「真の父母」、氏族における「真の父母」等については複数存在します。しかし、人類の「真の父母」というとき、それは永遠に一組です。

このような「原理」の基本を理解していないUCI側の人々であるために、櫻井正実氏は「**今現在この地上で真の父母に立たれている方は顯進様と全淑様ご夫妻である**」と主張するようになっていきます。これは、非原理的な言説にほかなりません。

私たちは、「真の父母」を正しく知り、UCI側が主張している、非原理的な言説に惑わされないようにしなければなりません。